

今、回顧すると苦しい悲しい思い出ばかりが懐かしく感じられますが、その苦しい体験をバネに活用して戦後の再建に「何糞これしきのこと」と、常に悪い条件をはね返して成功へと頑張れたことはえがたい貴重な収穫であったと感じています。

駆逐艦「五月雨」

茨城県 渡 辺 善 夫

—渡辺さんは海軍の昭和十七年五月志願だとのことですが、先ず海兵団入団の時の概要を聞かせて下さい。

私は大正十三年の十二月二十三日生まれでした。

昭和十五年までは、海軍の徴兵は一月十日、志願は六月一日だったのですが、十六年からは、一月徴兵、五月志願、九月志願と徴兵と年三回になったわけです。そして、制度として、徴兵は現役三か年、志願五年だったのです。

私は昭和十七年五月、横須賀の楠か浦第一海浜団に入団したのです（今その建物は米海軍が使っている）。八月十五日に基礎教育を卒業したが、卒業後全部がどこかへ配属されるわけで、私は『駆逐艦「五月雨」乗り込みを命ず』ということでした。

八月十六日、呉の海浜団へ仮入団のため「隊伍陸行（汽車で行くこと）」しました。その時、「五月雨」「春雨」「村雨」「夕立」の四隻で第二駆逐隊を編成していたこのことです。その時、乗り組みを命ぜられた「五月雨」はソロモン諸島におりました。

九月の末、「サクラメンテ丸」という油槽船に便乗して、先ず南洋群島のトラック島へ行ったのですが約一週間かかったのです。そこでこんどは特務船「間宮」に移乗し一週間、その後、二等巡洋艦「由良」へびんじょうして、ガダルカナル島のでまえのショートランド島につきました。ショートランドは海軍の前線基地で、珊瑚海海戦が終わって、艦隊が帰って来た時でした。十七年十月十六日、そこで「五月雨」へ乗ったのです。

—いよいよ、連合艦隊の最前線で、ガダルカナル攻防

戦ははげしくなるし、ソロモンでの日米決戦の時期

でしたが、入隊五か月で初陣となるわけですね。

ここまできると空襲はありましたが、陸上に物資はありました。本来は一週間ぐらいの新兵教育をやる予定だったが、それは出来ないで、十六時頃になると出港し、夜中にはガダルカナル島に食糧、弾薬を運んだ。毎日、昼は基地のショートランド（ポーケンビル島の南の小島）で待機し、夜はガ島行き、だいが続きました。

十一月三十日、ルンガ沖海戦（夜戦）切り込み、艦砲射撃（ガ島輸送の駆逐艦八隻と敵有力部隊と交戦し、そのとき揚陸は不成功）のたたかいだったが、新兵は夜眠くても眠られぬし、うえの人の洗濯もしなければならぬ。

その少し前の十一月十二日から十四日までが、第三次ソロモン海戦ですが、「五月雨」はそれにも参加しました。陸軍がガ島飛行場をだっかいするため艦砲射撃をしたのです。空母三隻、戦艦一、重巡洋艦四、軽巡一、駆逐艦十六の大艦隊と米海軍水上部隊、戦艦群との大海戦だったとあとで知りました。その時に、我が戦艦、「比

叡」「霧島」がやられ、重巡「衣笠」と、駆逐船「綾波」「暁」「夕立」も沈没しましたが、私の乗りこんでいた「五月雨」は大丈夫でした。

——戦闘中の初年兵の苦勞は心身共に大変だったでしょう。

私は機関兵だったので、勤務中はとてもあつかったです。夜は初年兵だから睡眠時間は少ない。昼になると空襲があるとまた眠れない。戦況については、機関兵は艦の底の方にいるから、そこへは出られないのでわからない。砲撃、雷撃が終わればそこへ出るが、それが我々の仕事。機関は蒸気タービン。弾薬庫は前部と後部にあるが、普通は砲塔のまじにある。砲塔が直撃弾をくえば弾薬が誘発することもある。

艦のうえも大変だが、勤務とはいえしたも大変だった。私が乗っている間は直撃はなかったが、至近弾で鉄板のリベットがはずれ水がはいったことがあった。燃料はB重油を使っていた。

雷撃をくったことはあるが、かわしたこともある。駆逐艦は右から来た時は、右をぎやく回転して左を全速回

転、舵を右いっぱいになると、艦は三十度ぐらい傾いて、回転舵を取ってその潜水艦を追跡して、爆雷を投下するのです。

米国の魚雷は気泡が出て航跡がわかる（石油エンジンを積んでいる）。日本も石油エンジンだが、完全酸素（九九％）を使っているので完全燃焼する。危険だが、最初点火してすぐ酸素に切りかえる。そのため泡が出ないから航跡がのこらない。これは機密兵器で、終戦までもれなかった日本海軍の誇りだった。

回転をぎやくにするのは手動でやる。スクリューは機関料の受持ち、操舵は艦長がやる。海戦が終わり、十一月末だったか、十二月はじめ横須賀へ帰り、三号ドックでリベットのはずれたなどを修理した。その時、はじめて故郷へ軍服姿で帰った。四十八時間の休暇でした。

―再出港はいつ頃でしたか、時期的にはガ島撤退の準備中だったと思いますが、またショートランド基地へ復帰でしたか。

十二月十九日、横須賀出港、正月はトラック島でした。一月十五日にショートランドにです。一月末には相変わ

らず陸軍の物資輸送で、ネズミ輸送です。我々は「海軍丸通」だといって、駆逐艦乗りは運送屋じゃない（ガ島定期便）と不満だった。

二月節分の頃、ガ島撤収があった。駆逐艦二十隻がそろって行きました。大きな艦船は足手まといになるので行かぬ。駆逐艦は巡航（経済）速度は二十一ノット、最高三十五ノットぐらい出た。海水が冷たければもっと速度が出たが、三十ノットぐらいだった。だが、燃料はみるみるなくなる。油はタンカーでショートランドまで運んでいた。

*ガ島第一次撤収（十八年二月一日）

―駆逐艦二十隻、約五千人収容、二日ボーゲンビル島着。

第二次撤収（二月四日）

―駆逐艦隊二十隻、第十七軍司令官以下約五千人収容、五日ボーゲンビル島着。

第三次撤収（二月七日）

―駆逐艦十六隻、約千八百人収容、八日ボーゲンビル島着、ガ島撤収作戦終了。

ガ島戦での日本軍損害は航空機八百九十三機、陸軍
将兵は米軍の三倍（戦死八千二百人、戦病死一万一
千人、第二師団勇兵団、第三十八師団沼兵団の主力）
であった。

―収容したガ島の兵士のようすは如何でしたか。

ガ島撤退の陸軍の兵隊はやせおとろえ、ポロポロの服
で小銃だけ持って上甲板にゴロゴロ寝ている。駆逐艦だ
から艦のなかへは入れられない。甲板のしたはもう機械
室ですから。戦艦や巡洋艦と違うので気の毒だが上甲板
以外収容出来ない。悲惨なもので「陸軍でなくてよかつ
た」と思った。

ガ島撤収は三回やった。その間、勿論死傷はあった。
艦は二列縦隊で進むので、前から二隻目（二番艦）はや
られて沈んだようだが、艦名は忘れたが。兵員はブーゲ
ンビル島で降りし作業は終了した。

―ガ島作戦のつぎはどこですか。

二月中旬、パラオ島から第四十一師団（河兵団で宇都
宮師管編成）をニューギニアへ運んだ。何べんも運んだ
が、水戸の兵隊がはいっていた。実はそのなかに兄がい

たんですよ。帰ってから知ったのですが。

三月には、第五十一師団（基兵団で、これも宇都宮編
成）をラバールからニューギニアに運んだ。

三月二、三日、の両日で輸送船八隻だが、全部空襲
で沈没し、護衛の駆逐艦もやられたが相当残った。

三月に輸送作戦が終わって、四月中旬にトラック島へ
帰ってきた。トラック島にしばらくいて、五月のはじめ
アツ島玉砕のため横須賀へ帰り、北洋艦隊を編成して
北千島の守占島、幌筵島えはいり、なんべんか出撃した
が成功しなかった。

これは、キスカ撤収作戦だったので、戦うのが目的で
はなかった。霧が深く一寸先がみえない。当時米軍は電
波探知機が進んでいたのので、相当やられたという話は聞
いていた。一週間ぐらいそこにいたが、五月というのに
寒かった。防寒具は横須賀から積んでは来たが、なにし
る南から急に北へ行ったのだから。

その時は駆逐艦ばかりでなく、巡洋艦も一緒だった。
キスカ撤収が終わらないうち、海軍工機学校普通科練習
生として入校のため、十八年五月末「五月雨」を退艦し

て、重巡洋艦「摩耶」に便乗した。青森県の野辺地へ上陸して横須賀まで陸行しました。

第五期普通科内火術練習生となった(主としてディーゼルエンジン)。当時は燃料がとぼしく、小型艦(潜水艦、軽巡洋艦、海防艦)はほとんどディーゼルにかえていた。三か月教育を受け、十八年九月末に卒業、その後横須賀海兵団の補充分隊に一月ぐらいいた。

—その後は、艦には乗らなかつたのですか。

三重の鈴鹿海軍航空隊で、第五百二十三海軍航空隊(通称・鷹部隊)が編成されそこへ転属した。十二月のはじめに感冒にかかつて、四十度以上の熱が三日ぐらい出て入室していたが、横須賀の海軍病院へ入院させられた。その時は飛行機で、鈴鹿―横須賀と空輸されたわけです。そのため、私のかわりの人が補充分隊から鷹部隊へ転動させられた。

これがまったく運の別れだった。鷹部隊は液冷V型エンジンの航空機(艦上偵察機だったと思う)で、私が入院しなければ、おそらくテニアンへ行って玉碎していたと思う。かわりにいった人は同年兵で、茨城県那賀郡の

出身で、戦後御遺族がなかなかわからず、やっと募参して来ました。

私の入院は四十日ぐらいいで、退院後、久里浜の保養班へ一月ぐらいいっていました。十九年四月、第三岡崎海軍航空隊へ勤務、ディーゼル発電機を運転する役だったが、新設航空隊のため据えつけが完了していなかった。そのため機関科倉庫で、資材・器材・自動車関係の管理、調達など、裏方勤務をさせられて、ひにくのたんにたえない日々を過ごしていた。

二十年一月、機関学校高等科練習生の指名入校の通知があり、練習生として三か月間教育を受けたが、二十年六月海軍の練習生制度が全廃された。

当時、すでに連合艦隊はほとんど壊滅、沖繩玉碎、本土決戦準備という、乗る艦船もなく、空襲激化の末期的な時だったが、我々は最後まで戦うという気持ちでした。

私は今度は、特攻兵器整備要員となった。特攻というと、水上特攻は「丸四」というベニア板の舟で、前に機関銃を装備し爆装してあるもの(敵船にぶつかり自爆

する)。

水中特攻は特殊潜航艇「海竜」で二人乗り、「蛟竜」は五人乗り。水上は二十五隻が一隊で、通常は二隊、五十隻で一組となっていました。

五月〜六月、沖繩戦の最初は戦果はあがったが、末期には米軍は「丸四」が来たら電柱(丸材)を上甲板からおとす。「丸四」は材木と心中してしまった。

私は水中特攻「海竜」の整備をした。艇長は大学出の予備士官、艇付は予科練の昭和十九年末にはいった十三、十四期生(教育が終わって飛行機の訓練をさせようとしたが飛行機がない。それで水中特攻隊(「海竜」をSSと言った)を要員とした)。

私は八月、横須賀海軍航空学校から、鳥羽基地へ隊ごと移動することになっていたが、八月十五日終戦となり鳥羽へ行かず横須賀へ帰った。

ところが、我々水中、水上特攻隊は、米軍艦入港前に一番先に帰すという指令がでた。

「特攻はなにをやるかわからない」というので、私たちは八月二十四日復員した。駆逐艦「五月雨」はパラオ湾

内で座礁したところを米潜水艦にやられた。

我々「五月雨」乗員は「五月雨会」を結成し、小田原市早川の東善院に慰霊碑を建立しました。